

## あけぼの会奨励賞

「妻が乳がんになったとき」

楊 於東（よう・おとう）

42歳／会社員／東京都

『悪性って言われちゃったよ』半ベソ顔の絵文字で書かれた表題に続いて、妻から届いたメールは、こんな書出しで始まっていました。春物に衣替えして間もないこの日は、私たち夫婦にとって、『乳がんと闘う』という新たなテーマが加わった日でもありました。それからの数日、この突然の出来事を素直に嘆き、悲しみ、そして先行きへの不安に何も手につかずに過ごしていました。あるときは二人で、またあるときは、それぞれが独りで…。

ただ、幸いだったのは、検査をしたクリニックで、治療を受ける病院をすぐに紹介いただけたことでした。おかげでいつまでも塞ぎこむことなく、気持ちを切り換え、妻ともども前向きに治療に専念することができました。

先に言ってしまうと、妻の場合は、春先の手術に始まり、盛夏の放射線治療を経て、晩秋からはホルモン治療の段階に入り、今日に至ります。

ホルモン治療は数年にわたって薬を服用し続ける必要があります、その点では乳がんの切除を行うだけで終わりではありません。薬を服用しながら、乳がんと闘い、そして常につきまとう再発への不安とも闘い続けることになります。

さて、妻はいま、以前の元気さを取り戻しつつあります。もちろん5年先も、10年先も、このまま何もなく回復していくことを願ってやみません。

ただ、身体の回復と同じくらい大事なことは、精神的な『回復』です。

乳がんを患って、たった1年の間に、妻は、やりがいのあった仕事を離れ、合格した大学院への進学も断念しました。そして、夫婦にとってこれが一番つらいことですが、治療を終えるまでは、子供を授かることもできません。『乳がんと闘う』という突然のテーマは、妻や夫婦のいくつかの夢を奪い、代わりに乳がんになった経験を通じて何かを学び、それを活かすことを否応なしに私たちに課したようです。

私たちが学んだこと。それは、乳がんになり、治療していくことは、必ず痛みを伴う犠牲を強いられる、ということです。これは本人はもとより、家族や友人、職場の仲間にも及ぶことです。残念ながら患ってしまった運命を変えることはできません。しかし、この経験を活かし、誰かと共有することはできます。私たちが余儀なくされたこの経験を分かち合うことが、乳がんを早期に見つけようとする意識づけになり、同じ経験をする方が少しでも減るようなささやかな手助けになればと思います。

そして、私は、この筆をとりました。